

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和六年七月一日発行 第二二四号

檀信徒の皆様、こんにちは。一年の半分が過ぎました。遅い梅雨入りとなりましたが、気温が上がらないこの時期でも、思わぬ発汗から熱中症になることが有るそうです。体調管理にはお気を付けください。

さて、六月の講習会では「教えの継承と教団の分裂と分派」と題してお話をさせて頂きました。お檀家様から「なぜ仏教には様々な宗派があるのですか？」と質問されることがあります。結果からお伝えすると、お釈迦様の生前中にお尋ねすれば、その答えが全て正解でした。しかし、お釈迦様の入滅後には戒律などの決まりごとの解釈が曖昧になり、様々な見解から教団が分裂してしまいます。その一因にはお釈迦様の教えが「対機説法」であったことが挙げられます。対機説法とは、相手の理解度や状況に合わせて、最適な方法で仏教の教えを説くというものです。お釈迦様は、たとえ話や質問を用いたり、相手に合わせて語り口を変えたりしながら、一人ひとりに寄り添った説法を行っていました。しかし、この柔軟さが、修行規則の解釈の違いを生み、分裂の一因となったとも考えられます。お釈迦様は最期のお説法で「自灯明法灯明」を説かれました。これはお釈迦様が亡くなった後に弟子たちが何を拠り所としていくべき

かを尋ねられた際のお釈迦様の遺言とも言わべき教えです。お釈迦様は弟子たちに対して「他人を頼りとするのではなく、自分自身を拠り所としなさい。そして人生の道に迷った時は、私（釈迦）がこれまで説いてきた教えを拠り所としなさい。」と説きました。お釈迦様は修行者たちに自立を望みました。

また別のお話として「筏（イカダ）のたとえ」という法話があります。ある旅人が、旅の途中大きな河のほとりにたどり着きました。そこには橋も掛かっておらず、河を渡す船頭などもいませんでした。そこで旅人は周りを見渡し、落ちている木々や藁などを拾い集め、筏を作り、河を渡ることに成功したのでした。渡り終わった旅人は考えます。この筏は便利だから背負って旅を続けよう。ここまでお話をしたお釈迦様は弟子たちに訪ねます。「弟子たちよ、汝らが旅人であったならばどうするか」と。様々な意見が出る中で、お釈迦様はこう説かれました。「筏を背負って旅を続ければ、荷物が増えて旅の妨げになるであろう。筏は河を渡るための手段であり、目的ではありません。河を渡るために成功したモノであっても、人生という旅の妨げになるのであれば、それには執着をせず手放すべきである」と。人生の成功経験は自己を肯定するものです。ですが、時としてその成功体験が気付かぬ形で執着となり人生の足かせとなっている事もあります。この様な説話も残し

ているため、様々な見解を生むことにもなっています。

そもそも、お釈迦様は仏教教団を作ることを目的としたのではなく、悩み苦しむ人々を救済するために、自らの悟りを分け惜しむことなく説き続けました。ですから、お釈迦様は、入滅後に教団が分裂や分派する可能性を理解していたのかもしれませんが。お釈迦様がお亡くなりになり約二六〇〇年と言われています。むしろこの柔軟性が今の多様化を尊重する時代には必要とされているのではないかと、個人的には思っています。

六月十八日に先代住職十三回忌法要を行いました。厳粛な雰囲気の中、僧侶十四名と総代様方にも参列頂き、故人への深い敬意を表しながら読経を捧げました。法要後には、新しく完成した会館にて会食を行い、故人への思い出を語り合い、親睦を深めました。法事というとか形式的なイメージになりがちですが、故人にゆかりのある方々が集い、故人を偲び、互いの近況などを報告する時間として思うと実はとてもスピリチュアルなことを執り行っているのだと感じました。一つの年忌を終え、肩の荷が下りた気が致しております。また、お檀家様のご供養に対する意識も新たになったような気がいたしております。

八月の講習会はお休みです。八月三日（土曜日）六時より本堂の大掃除並びに境内の草取りを行います。